皮膚科が取り組む ニキビ・シミの自費診療

投資少ないケミカルピーリングが高い集患効果

ニキビやシミの治療に有効とされ、近年エステティックサロンなどで人気の「ケミカルピーリング」について、昨年11月、厚生省は医療行為と見なすとの見解を都道府県などに通知した。結果的に、医療機関でこの治療を受けようとする人が増えたこともあり、皮膚科だけでなく他科の診療所でも、美容領域の診療に取り組む動きが出てきた。

新宿南口皮膚科（前口瑞恵院長、東京都新宿区）は、JR新宿駅から歩いて数分のオフィスビルの9階にある。3年前にオープンしたばかりだが、サロン風の待合には20代から30代の女性患者が数多く訪れている。

皮膚科診療の幅を広げたい

この診療所では、保険による一般の皮膚科診療だけでなく、シミやシワ、ニキビなどの肌のトラブルに対して、レーザー治療やケミカルピーリングなどの保険外の治療を積極的に取り入れているのが特徴だ。これらの治療を受けに来る患者は、1日の外来患者約70人のうちの3割を占める。

院長の前口氏は東京女子医大の皮膚科に約10年勤めた後、「保険の枠に

「シミやニキビの自費治療に対する患者のニーズは高まっています」
院長の前口瑞恵氏

女性患者を意識した新宿南口皮膚科のサロン風の待合

ニキビやシミの治療に用いる自家調合薬（新宿南口皮膚科）
グリコール酸ローション（2000円）
ビタミンCローション（2500円）
抗菌剤入りローション（1500円）など。

とらわれずに、患者が満足できる皮膚科治療をじっくり時間をかけて行いたい」と考え、開業を決意したという。

病気とはいえない老化によるシミやシワなどの治療は、これまで主に形成外科医がかかわってきた領域といえる。しかし、皮膚を診るのが専門の皮膚科医の間でも、徐々にこうした美容分野に対する関心は高まっているようだ。「最近では皮膚科関連の学会でも、美容領域に関する教育講演などがあり、皮膚科医がたくさん集まっている」と前口氏。

特に、美容を自分自身の身近な問題としてとらえることができる女性の皮膚科医は、こうした領域に抵抗感なく参入できるようだ。

神戸市東灘区で開業している原皮フ科院長の原洋子氏も、2年前にレーザー装置を購入し、同時にケミカルピーリングなども始めた。

もっとも皮膚科医がいわゆる美容皮膚科に取り組み始めた背景には、従来の一般皮膚科だけではこれからはやっていけないといった危機感もある。原氏も「皮膚科以外の診療所でも、皮膚科の軟膏を出すところが増えている。これからは皮膚科医ならではの武器が必要」と美容皮膚科に取り組む動機を語る。

今のところ、原皮フ科の美容皮膚科の患者は全体の1割程度だというが、「患者は徐々に増えつつある」と原氏は手ごたえを感じている。

ケミカルピーリングは“医療行為”

現在、美容皮膚科で行われている自費診療の内容は、①ケミカルピーリング②レーザー治療③自家調合薬——などが中心だ。

ケミカルピーリング（chemical peeling）とは、酸性の液を皮膚に塗り、皮膚表面を薄くはがす処置のこと。使用する酸の種類や濃度によって皮膚への影響は異なるが、「2週間に1回のペースで数回処置を繰り返すと、保険薬では治らない難治性のニキビにも効果がある」と前口氏（囲み記事参照）。また、治癒後も再発防止のために定期的に処置を受けにくる患者も多い。

ケミカルピーリングは米国では10年ほど前から皮膚科や形成外科で行われている治療法だが、日本では98年ごろから主にエステティックサロンなどを中心に急速に普及した。しかし、皮膚障害などの被害が続発したため、昨年11月、厚生省は都道府県と日本医師会に通知を出し、ケミカルピーリングは医療行為であり、医師以外の者が行う場合は医師法違反になるとの見解を示した。

こうした経緯もあり、ケミカルピーリングの治療を受けたい患者が、医療機関に流れ始めている。

料金は診察料などを含めてすべて自費扱いとなるため、医療機関によって差がある。皮膚科クリニックでは、エステティックサロンなどが設定していた料金よりも安くしているところが多く、1回5000円から1万円くらいが相場のようだ。

ピーリング剤は、調合済みのものを購入する方法もあるが、自家調合すればほとんどコストはかからない。

レーザー治療は初期投資がネック

ケミカルピーリングのほか、シミのレーザー治療も美容皮膚科の目玉だ。最近ではレーザー装置の種類も増え、治せるシミも多くなっている。

昨年5月にかんだクリニック（尼崎市）を開設した院長の欠田良児も、Qスイッチアレキサンドライトレーザーと炭酸ガスレーザーを購入し、シミやほくろなどの治療に積極的に取り組ん

■ニキビに著効のケミカルピーリング

症例●23歳女性（前口氏提供）

＜治療前＞
あごの回りの難治性ニキビ。

＜ケミカルピーリング実施後＞
2週間に1回の頻度で10回実施。

新宿南口皮膚科のケミカルピーリング用のベッドはエステティックサロン専用に作られたもの

ケミカルピーリングでは、フルーツ酸と呼ばれる酸を皮膚に塗り、皮膚表面の角質を取り去る。ニキビやシミなどの治療に有効とされる。中でもニキビへの効果が高い。

シミやほくろなどの治療に用いるレーザー装置（かんだクリニック）
Qスイッチアレキサンドライトレーザー（左）と炭酸ガスレーザー（右）。

でいる。「レーザー治療は、シミのタイプなどをきちんと鑑別診断することができれば高度なテクニックは必要ないので、皮膚科医にとっては導入しやすいだろう」と欠田氏は話す。

ただし、レーザー装置の値段は高額だ。欠田氏の場合も、レーザー2台の費用は2千数百万円に上った。「美容皮膚科を看板に掲げるには、やはりレーザー装置は不可欠だと判断したが、今のところ外来患者の9割は一般皮膚科の患者で、美容皮膚科の患者はそれほど多くはない。まだ採算が取れているとは言えない」と欠田氏。

とはいえ、1日の外来患者は約50人と開業1年目としては順調な滑り出しを見せている。今後、美容皮膚科の患者がどれだけ増えるかだが、「遠方から来る患者も徐々に増えてきた。ニーズはある」と欠田氏は話している。

レーザーなしの参入も

一方、レーザーを購入せずに美容皮膚科を手がけるケースもある。ささき医院（佐々木幸弘院長、埼玉県富士見市）の場合は、ケミカルピーリングが美容皮膚科のメーンとなっている。

佐々木氏は98年に一般皮膚科と泌尿器科で同医院を開設したが、1年前から美容皮膚科も始めた。きっかけは、「女性雑誌でケミカルピーリングを知った患者から、当院でもやってくれないかと頼まれたため」（佐々木氏）。同クリニックは池袋から東武東上線で30分の駅前ビルの2階にある。この周辺はマンションなどが立ち並ぶベッドタウンだが、駅前には美容皮膚科に取り組む医療機関はなかったという。

佐々木氏は、さっそくケミカルピーリングについて書籍等で勉強するとともに、美容皮膚科の経験豊富な医師のもとで技術を習得した。また、同氏の妻の香苗氏は、自らもエステに通っていて、美容についての知識が豊富だったため、良きアドバイザーとなった。

現在は、メディカルエステコースを作り、①ケミカルピーリング②毛穴の汚れを取る吸引③ビタミンC、プラセンタなどの有効成分を皮膚深く浸透させるイオン導入――などを行っている。手順としては、佐々木氏が患者を診察した後、香苗氏ら専属スタッフ3人がメディカルエステを担当する。料金は、1回5000円から6000円。また、同医院でもニキビ治療のためのビタミンCローションのほか、ハイドロキノンやコウジ酸などのシミの治療薬を自家調合している。いずれも500円から2500円と手ごろな値段だ。「この料金でも十分に利益がある。美容皮膚科ということで高価な化粧品並み

「駅前で開業したので、遠方からも美容皮膚科の患者は来院します」
皮フ科・形成外科かんだクリニック院長の欠田良児氏

かんだクリニックの美容皮膚科の主な治療内容と料金

レーザー治療
- Qスイッチアレキサンドライトレーザー（1ショット）　300円
- 炭酸ガスレーザー（顔）　5000円

ケミカルピーリング（グリコール酸、サリチル酸）
- （顔）　5000円

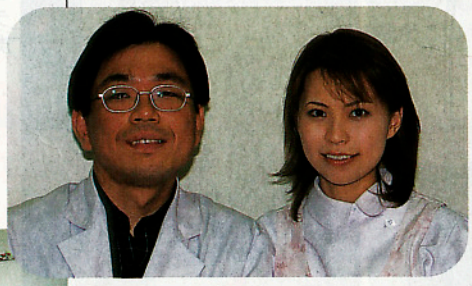
オリジナル外用剤
- コウジ酸（10g）　300円
- 2％ハイドロキノン（10g）　1000円
- 0.1％トレチノイン（5g）　2500円

イオン導入（弱い電流を用い、イオン化した薬剤を皮膚の深くまで浸透させる方法）
- ビタミンC　1500円
- プラセンタ　3000円

ささき医院
皮フ科・泌尿器科

「ケミカルピーリングを始めたのは患者からの要望がきっかけ」

院長の佐々木幸弘氏とエステを担当する香苗夫人



蒸気を当て、毛穴の汚れを吸引するエステ用の装置。メディカルエステで用いている

「雑誌や教科書で勉強すればピーリング剤も自家調合が可能」と佐々木氏。

の値段を設定しているクリニックもあるが、うちはあくまでも医薬品との意識から料金を設定している」と佐々木氏は話す。

美容皮膚科の患者は1日約10人ほどで「メディカルエステを始めてから、自費収入分で、月に約100万円の増収となっている」という。

今のところ、佐々木氏はレーザーを購入する予定はない。「レーザーは資金が潤沢ならば購入するのも一法だが、診療所開設の初期投資としては高過ぎる。シミは自家調合薬で対応している」と佐々木氏は話している。

皮膚科以外のクリニックも

今後は皮膚科診療所に限らず、美容皮膚科を手がける医療機関は増えていきそうだ。美容皮膚科のニーズに注目しているのは皮膚科医だけではない。昨年10月に北青山ディークリニック（東京都渋谷区）を開設した阿保義久氏もその一人だ。

阿保氏の専門は外科で、同クリニックの売りは下肢静脈瘤や鼠径ヘルニアなどの日帰り手術だ。それに加え開設当初から東大病院や慶応大病院に勤める若手医師を非常勤として招き、生活習慣病の早期発見のための検診や美容皮膚科なども取り入れた。

美容皮膚科の診療は週2日、2人の皮膚科専門医が担当する。ケミカルピーリング、レーザー治療のほか、コラーゲンの注入によるシワ治療などを行っている。「美容皮膚科を取り入れたのは、美容領域に対する医療ニーズが高まっていると判断したから。保険の枠を越えた自費診療の可能性も探ってみたかった」と阿保氏は語る。

保険医療機関は混合診療に注意

ところで、美容目的の治療やピーリングなどの特殊療法は、自費診療となるので、保険医療機関の場合は混合診療にならないよう注意が必要だ。

例えば、ニキビの治療を保険で行っている場合に、途中からケミカルピーリングを開始しようとするときは、その時点からニキビの治療はすべて自費扱いに切り替える必要がある。

厳密に言うと、保険でできるニキビの治療を続けながら、例えば500円の自家調合薬を治療に加えるといったことも混合診療に該当してしまう。

このように、混合診療の縛りから、患者が満足のいく治療が受けられなかったり、治療費が高額になるなどのケースが生じることもあり、現場ではルールの見直しを望む声もある。

混合診療について厚生労働省保険局医療課は、「一つの疾患に対する一連の診療で、保険診療と自費診療が混在することは、医療保険制度上禁じられている。自費診療と保険診療を、それぞれ異なる疾患の治療に対して行う場合は混合診療に当たらないが、その場合はカルテは別にする必要がある」と説明している。

（友吉 由紀子）